主 文

本件再審査請求を棄却する。

事実及び理由

第1 再審査請求の趣旨

労働基準監督署長（以下「監督署長」という。）が○年○月○日付けで再審査請求人（以下「請求人」という。）に対してした労働者災害補償保険法による障害補償給付を支給しない旨の処分を取り消すことを求める。

第2 事案の概要

- 1 請求人は、A所在のB会社を派遣元として、派遣先のC会社C（以下「事業場」という。）において、事務職として就労していた。
- 2 請求人は、○年○月○日、事業場内の階段を上がっていたところ、転倒しかけて左膝を床に強打し負傷した（以下「本件災害」という。）。
請求人は、同日、D医療機関に受診し、「左足部捻挫、左膝関節打撲傷」（以下「本件傷病」という。）と診断され、療養の結果、○年○月○日治癒（症状固定）となった。
- 3 本件は、請求人が、治癒後障害が残存するとして障害補償給付を請求したところ、監督署長は、請求人に残存する障害は労働者災害補償保険法施行規則別表第1に定める障害等級（以下「障害等級」という。）に該当しないとして、これを支給しない旨の処分（以下「本件処分」という。）をしたことから、本件処分を不服として同処分の取消しを求める事案である。
- 4 請求人は、労働者災害補償保険審査官（以下「審査官」という。）に対し審査請求をしたところ、審査官が○年○月○日付けでこれを棄却する旨の決定をしたことから、更にこの決定を不服として本件再審査請求をした。

第3 当事者の主張の要旨

- 1 請求人
(略)
- 2 原処分庁
(略)

第4 争 点

請求人に残存する障害が、障害等級に該当する障害であると認められるか。

第5 審査資料

(略)

第6 理 由

1 当審査会の事実認定

(略)

2 当審査会の判断

(1) 請求人の自訴及び医証等から、請求人に残存する障害として検討すべきものは、①左膝関節の機能障害及び②左膝の神経症状であると認められるので、以下検討する。

(2) ①左膝関節の機能障害についてみると、○年○月○日付けのE医師作成の診断書に記載された関節可動域は、右膝関節の可動域が 140° であるのに対し、左側関節の可動域は 110° となっており、健側の可動域角度の $3/4$ 以下とはなっていないので、当審査会としても、決定書(略)理由に説示のとおり、請求人には、障害等級に該当する程度の左膝関節の機能障害は残存していないと判断する。

(3) ②左膝の神経症状についてみると、請求人は、左膝の腫張、熱感に加え、夕刻、降雨時、寒冷時、階段昇降時、正座時及び坂道の歩行時等に生じる疼痛等の神経症状を訴えており、上記(2)の診断書には、障害の状態として、「左膝痛があり長距離歩行困難、正座困難」との記載がある。

また、請求人が療養していたD医療機関の診療録には、請求人の左膝に残存する神経症状について、「雨の日は膝痛。」、「昨夜は痛みで眠れなかった。」など、断続的な神経症状が存在することを示唆する記載はあるものの、常時神経症状が残存することを示唆する記載は認められない。

さらに、F医師は、○年○月○日付けの意見書において、要旨、「画像を確認したところ、レントゲンにおいて骨折を認めず、主治医意見書において、骨、軟骨、関節等の損傷なし、皮膚、皮下組織、筋肉、腱、神経、血管、靭帯などの軟部組織の損傷なしと確認されるが、神経症状については、後遺症に該当する程度のものとは考えられない。」との意見を述べている。

以上を踏まえ、当審査会としても、決定書理由に説示のとおり、請求人には、

障害等級に当たるような神経症状は残存していないものと判断する。

なお、請求人が提出した○年○月○日付けMR I 検査報告書によれば、膝蓋上囊の液貯留、関節軟骨の軽度菲薄化及び内側半月板後節のT2*強調像等での信号上昇が認められるが、同検査は本件災害の○年○か月後に行われたものであり、本件災害で療養中の○年○月○日には自転車に乗っている際に転倒し受傷していることを併せ考えれば、当審査会としては、同報告書に記載された左膝関節の病変が本件災害によるものであると判断することはできない。

さらに、請求人は、MR I 検査を行わずに作成された意見書を根拠として行った監督署長の判断は誤りだと主張するが、受傷部位の疼痛についての障害等級の認定は治癒時の疼痛の程度により判断されるものであることを付言する。

(4) 請求人のその余の主張についても子細に検討したが、上記判断を左右するに足るものは見いだせなかった。

3 結 論

以上のおおりに、本件処分は妥当であって、これを取り消すべき理由はないから、請求人の本件再審査請求を棄却することとして、主文のおおりに裁決する。